

# ハンブルグ日本人学校における学校運営

—「夢のたまご」を育む—

前ハンブルグ日本人学校 教頭

奈良県香芝市立下田小学校 教頭 関 口 純 司

キーワード：教育環境，現地理解教育，学校行事，学校運営，管理職

## 1. はじめに

ハンブルグ日本人学校に赴任して間もない5月，日本やドイツから多くの来賓を迎え，創立二十五周年記念式典が催された。そのプログラムの中で，全校児童生徒が「ふるさと」を合唱した。そこには，顔を真っ赤にして，も



25周年式典での合唱風景

うこれ以上開けないと思われるくらいに口を大きく開け，身体を躍動させながら歌う子どもたちの姿があった。日本から遠く離れてドイツで暮らす子どもたち，言葉も生活も自分の思い通りにならないことが多い環境の中で，自分を精一杯表現しようとしている姿があった。進行役を務めながら，日本で聴くのととは違った不思議な感情が，私の中に湧き上がるのが感じられた。子どもたちの歌う「ふるさと」は，家族と離れ新しい環境に戸惑っている私への励ましのメッセージのようにも響いて，胸が熱くなった。そして，下校する時，バスの中から大きく手を振って帰って行く素直な子どもたちに，海外で出会えたことが嬉しく感じられた。

## 2. 本校の概要について

本校創立は1981年，現在，幼稚園，小学部，中学部が併設されており，約100名が在籍している。新校舎に移って，今年（2009年）で16年目になる。暖房設備の整った校舎や体育館，芝生の大きなグラウンド，特別教室も設置され，非常に恵まれている施設である。理事会を中心としたハンブルク在住の方々これまでの多大な努力に感謝しなければならぬ。日本語教育だけでなく日本と同等の教育を求め日本人学校を創設した人々の熱い思いが感じられる。

さて，本校の教育目標は，「豊かな心を持ち，国際感覚を身につけ，進んで行動し，たくましく生きる児童生徒の育成」，めざす学校像は「喜んで登校，満足して下校」である。その言葉は，ハンブルクで多くのことを学ばせ，いつ日本に帰国しても日本の環境に適応できるよう，毎日精一杯子どもたちのために頑張れという教師への強いメッセージでもある。一方，派遣教員は海外で学ぶ子どもたちの教育に自分のこれまでの経験を生かしたいと大きな志を持って赴任して来ている。この派遣教員の持っている意欲とこれまで培ってきた豊かな経験を生かすことが，本校教育を発展させるという強い確信を持っている。しかし，自分の思い描いていた教育を実現するには，日本とは異なる子どもや派遣者を取り巻く環境を理解しておかなければならない。ここでは，ハンブルクでの学校運営の一端について述べてみたい。

## 3. 日本とは異なった教育環境

### (1) 授業を中心とした学習活動について

ドイツでは，日本とは異なる教育環境の中で学習活動を行わなければならない。例えば，5年生の理科を教えた時のことであるが，教材にあるメダカが手に入らない。仕方なくグッピーで学習したが，胎生のグッピーでは生命

の誕生の神秘さに触れることができても日本の子どもたちが学習している内容とは異なる。また、カボチャは、夏の気候の変化が大きく花が咲かない年がある。理科以外にも、算数の学習では、円とユーロ（ペニヒ）のお金の単位が異なるし、国語科では教科書に出てくる語句を子どもたちが理解しにくい等、指導者が戸惑うことがしばしばある。そのため、海外での教育活動の質を維持するためには、現地の教育事情に対応できるノウハウを引き継いでいく体制を構築しておく必要がある。

現地理解学習の一環として、小学部はベルリン、中学部はロンドンへの修学旅行を実施する。また、校外学習はハンブルク近郊へ出かけるのだが、日本とは勝手が違うため、計画や準備に何倍もの労力が必要である。海外だからこそ、丹念に様々な情報を集め、その中から子どもの実態に合わせたイメージ豊かな活動を創り上げる教師の能力が、日本以上に求められる。進学指導に関しても、日本からの情報が得にくい中、これまでの経験と各都道府県の先生方とのネットワークを生かして、生徒や保護者の願いに応える実践力が必要である。

## (2) 日本の文化に親しむ行事

学校行事では、七夕、もちつき、節分、書き初め会等、日本の文化や伝統行事に触れる機会をできる限り多く教育活動に取り入れている。最初は、書き初めの半紙、七夕の笹、もち米の購入から臼の手配等、海外ということもあり計画準備に苦労することが多かった。特に、餅つきは三年間で私の得意技になった。その他、ドイツでは高価な物や手に入りにくい教材などは、海外子女教育財団からの支援や新派遣者に依頼することになる。

## (3) 現地校や地域との交流

中学部とギムナジウム校との合同授業、十数年続いている北ドイツのダンネベルク小学校との交流、民俗博物館での現地校との子どもの日交流とひな祭り交流、幼稚部と現地幼稚園との森の日交流、二泊三日の夏季学校でのドイツ生徒たちとの交流等々。本校は充実した交流の機会に恵まれている。特に、夏季学校でのサッカーやソフトボールを通しての交流は、数年前より、先生方のアイデアで非常に充実したものになった。ソフトボールは、ドイツではあまり知られていないスポーツなので、最初のルール説明から大変だったようだが、夏季学校の最後には、ドイツの子どもたちも試合を楽しむまでに上達する。別れる際に、お互いサインを交換したりしている姿を見ると、何のわだかまりもなく片言の言葉とゼスチャーで通じ合える子どもの世界に感心させられる。ミヒャエリス子ども音楽祭やクリスマスマルクト等の地域行事にも参加している。そして、このような実り多い交流ができるのは、語学の堪能な事務長（幼稚部園長）や現地採用の総務の先生の協力があつたからである。



現地校との交流会後のお別れ風景

## (4) 学芸文化発表会

素晴らしい年間行事のひとつに、学芸文化発表会がある。ドイツ語劇や英語劇、時代物から現代の社会問題を扱った劇、歌や合奏等、幼稚園児から中学生まで、普段の姿とは違った一面を見せるこの行事を、子どもたちも保護者も大変心待ちにしている。たった二週間の練習ではあるが、各学年の見事な出来栄に本当に驚かされる。また、保護者や職員も趣向を凝らして参加している。そして、最後の幕が下りると、子ども達は大きな達成感と充実感を味わい、保護者を含めた全員が発表会の余韻に浸るのである。最後に、一つ一つの出し物について私がコメントするのであるが、子どもと担任が創り上げた努力と出来栄に応えるだけの講評になっていたかどうか、思い返してみると恥ずかしい限りである。

## (5) 国際的に活動されている人との交流

ハンブルク国際柔道大会への参加の際、日本代表柔道選手団に来校していただいた。その中に、当時、北京オリ

ンピックを目指していた野村選手、鈴木選手、谷本選手等、日本でもよく知られている選手がいた。当時、野村選手はオリンピック4連覇を目指し柔道に打ち込んでいた。私と同郷野村選手は、残念ながら三位。決して悪い結果ではないのだが、本人は優勝を目指していただけに満足はいく結果ではなかったようだ。ただ、彼の言葉からは、常に自分の成長を追い求める強い生き方が感じられた。学校の体育館で模範演技を見ている子どもたちにも、目標に向かって突き進んでいく彼のひたむきな姿勢は伝わったはずである。

また、飛行機の運航に携わっておられる女性整備士とフライトアテンダントの方との交流もあった。男性の整備士が多い中、女性整備士は非常に珍しい存在である。きっと、この仕事に従事されるまでには多くの難関があったことは容易に想像できる。だからこそ、「夢を諦めないこと」という彼女の言葉は、とても説得力があった。その他にも、麻生外相夫人やドイツで活躍されている日本人の方のお話を聞く機会もあった。日本にいと、話を聞くチャンスさえ無い素晴らしい人に出会えるのだから、子どもたちはとても恵まれた環境にある。

#### 4. 保護者と地域の方と共に

##### (1) 学校便り

学校の様子や子どもたちの姿を伝えられるよう、月2回程度、学校便り「悠々」を発行している。校長先生には、学校の教育方針について書いてもらい、さらに、子どもたちの姿を通して先生方の思いが保護者に伝わるように、日頃の行事や教育活動について記事を編集した。一方、担任は、毎週、学級通信を発行し、学級の取り組みや学級経営の一端を伝えた。先生方には大変な苦労ではあったと思うが、子どもの学校での様子を知らせることで、学級経営への保護者の理解が深まり、信頼を深めていくのにとっても大切な取り組みであったように思う。

##### (2) 学級委員会

子どもたちの安全や学校に関わる様々な問題について、保護者代表と話し合う学級委員会を構成している。さらに、運動会、学芸文化発表会、もちつき大会等の学校行事に積極的に協力してもらっている。

保護者と教師が子どもたちのために共に汗を流す手作りの教育がハンブルグ日本人学校の良さであると自負している。

##### (3) 保護者ボランティア

海外なので、どうしても子どもを取り巻く日本語環境が十分ではない。そこで、本校では、毎朝、朝読書の時間を設けている。その環境づくりのためには、図書室の環境整備が不可欠だと考え、毎年、図書の整備に力を入れてきた。図書担当の先生は、時間を惜しむように図書室の整備を行い、以前とは見違えるような読書環境になった。また、図書委員のユニークな活動を積極的に取り入れ、読書の楽しさを全校に広める取り組みを推進した。保護者の方には図書ボランティアをお願いし、購入した本のカバー付けから図書室の椅子の修理に協力してもらった。子どもたちが本を手にする度に、保護者の温かい思いが伝わることだろう。

##### (4) 学校評価

毎年、保護者による学校関係者評価を実施し、年2回の教職員による内部評価の結果と合わせ、次年度の学校運営や教育活動に生かすようにしている。着任した当初は、教育活動や教職員に対して非常に厳しい意見が多かったように思う。そこで、参観や懇談等、保護者が来校する機会に、教育方針や学級経営について担任から啓発するよう心がけ、また、実際の学校での子どもたちの姿に接してもらおうと、いつでも保護者が来校できる体制を整えた。その後の学校評価の中では、ハンブルグ日本人学校で学べることを肯定的に受け止め、ここで学べることを喜んでいる内容の記述が多くなった。毎年、評価をまとめながら、担任や教職員に対する信頼が深まっていることが実感できた。しかし、その理由の第一に上げなければならないことは、それぞれの担任が、一人一人の児童生徒に応じたきめ細かい学習指導と生活指導に取り組んだことである。

##### (5) ハンブルク日本語補習校と共に

運動会は同一校舎内にあるハンブルク日本語補習校と合同で開催する。特に、両校全員が参加する綱引きは、ド

イツにそのような競技が無いこともあり、すごい盛り上がりとなる。また、両校の保護者が合同でバザー（学校祭）を開催している。当初は、家庭で不要になった品物を活用してもらうという目的で始まったそうだが、今では現地の日本人だけでなく地域に住むドイツの人にも広く知られるようになり、学校にも開催日時を問い合わせの電話が頻繁にかかってくる秋の人気イベントとなっている。バザーでは、商品や日本の食べ物が販売されるだけでなく、ドイツの方の太鼓演奏や習字の実演と体験、本校生徒のお茶を出してのもてなし等もある。職員はきな粉餅や醤油餅の販売をして、結構ドイツの方にも喜ばれている。

#### (6) 理事会、総領事館

本校の理事会はハンブルクにある日本企業から選ばれた理事で構成されている。多忙な中、本校の教育や財政面等の支援について、真摯な姿勢で話し合っていたいただいていることに、言葉では言い表せない感謝の気持ちを持った。また、総領事をはじめハンブルク領事館の職員の方にも私たち教職員の生活面をバックアップしてもらっている。このように、学校と教職員が多くの人に温かく見守られていることので、安心して職務に従事することができた。

### 5. 全国から派遣された教師と共に

日本では、これまで中学校の専門教科の授業をしていた先生が、ハンブルクでは小学校の学級担任をしたり、あるいは小学部の教科を指導しなければならぬ。慣れない海外生活で、教師としては大変厳しい環境だと思うのだが、日々夜遅くまで教材研究を重ね実践しているひたむきな姿を見てみると、熱意が困難を乗り越える力になると改めて認識させられる。さすがに全国から派遣されてきた先生である。私も大いに刺激を受け共に働く機会を得られた喜びを感じた。ある年、全ての先生方の研究授業を参観する機会を持つことができ、授業後に先生方とじっくり授業について語り合えた。普段、話し合う時間がない職員同志にとって、コミュニケーションを深める貴重な時間となった。そして、管理職には、あらゆる教科における豊かな実践と指導力が必要であると痛感させられた。

派遣教員にとっては、日本とは違う教育環境、言葉の問題、異なる習慣や文化の中での生活、新しい人間関係等、新しい環境の中で職務を遂行するのは想像以上に忍耐力と強い精神力が必要である。そして、知らず知らずのうちにストレスがたまっていくものである。それを和らげてくれるのは、派遣者の家族や職場の仲間である。海外では、学校以外の私的な生活を含めて派遣者全員が大きな家族のようなものである。その点では、教職員一人一人の思いに寄り添い、生活面も含めて精神的にサポートできる管理職の資質が求められる。

### 6. おわりに

卒業生が本校を訪問することがある。校舎を案内しながら親子でその当時の思い出話に話が弾んでいる。きっとハンブルグ日本人学校の思い出をいっぱい詰め込んで、ハンブルクを去って行ったのだろう。校門を出られる時は名残惜しそうではあるが、一人一人の様子から活力が満ちているように感じられる。思い出の詰まった故郷ハンブルクは、何か不思議な力を与えてくれるようだ。

ところで、進路指導で中学部生徒の面接をすると、街中で自然に挨拶が交わされ、弱者へのいたわりを大切にしているドイツ社会の素晴らしさが印象に残っていると話してくれる。そして、将来、ドイツで学んだことを生かすような生き方をしたいと力強く語ってくれる。ノーベル賞を受賞された小柴昌俊氏は、「『自分のやりたいことはこれなんだ』と心の中に夢のタマゴを持ち続けてがんばってごらん下さい。道は開けるかもしれないよ……。』」そして「夢のたまごを持とう。自分の人生で一体何をしたいのか、何を成し遂げたいのかを見つけて、それを本気で追いかけよう。」と熱く語っている。海外では、生活体験や社会体験が不足しがちであったり、語学の習得が期待通りにいかないという課題はあるが、海外で経験したことは、必ず、子ども達の将来に生かされると信じている。ぜひ、日本の文化と伝統に誇りを持ち、でっかすぎるくらいの「夢のたまご」を持って、国際社会で活躍してくれることを願っている。